

発達障害の子どもの子育て ～高らかな火星宣言～

所長 中村 雅子

「うちの火星」 という本をご存じの方も多と思います。

就労や自立は、発達に偏りのある人や家族にとって、大切な目標であると同時に大きな壁かもしれません。しかし、「同じ当事者の親として私がいま思うのは、それぞれの特性を、本人や周囲の人が理解することで、その壁は必ず打ち破ることができるのでは…」 こう語るのは、コピーライターで文筆家の平岡禎之さんです。ご家族は、お子さんと奥様の5人。全員が発達障害。思いを分かち合える仲間を探したい、少しでも生きやすくなるために、多くの人に発達障害を理解してほしい、という思いから、精力的に執筆し、講演をせっせと行っています。

私が、はじめて平岡さんご夫婦にお会いしたのは、2016年夏、全国情緒障害教育研究会の会長として、徳島県特別支援教育研究会、徳島県発達障がい教育研究会主催の徳島大会に出席した時のことでした。平岡さんは、演題「うちの火星に気づいたとき」という記念講演で、笑いあり涙ありの子育てについてお話しくださいました。発達障害の子どもたちは、学校や職場で、気まぐれな怠け者、わがままな気分屋と誤解され、トラブルも起こりがち。しかし、平岡さんは、アンバランスなまま、それでも堂々と胸を張って生きていこうと決意し、家族の特性を生かして、ワッシーナ、ニャーイ、ウルフー、リスミー、ウッシーヤという火星の名前をつけ、それぞれの「取扱説明書」をつくりました。

例えば、長女のニャーイは、時間を忘れて何かに没頭することが多く、手洗いをするといつまでも洗い続ける、人の顔をじっと見入って時を忘れてしまうことも多かったという特性がありました。大人になって、その時の気持ちを聞いてみると、手を洗っているうちに、自分が蛇口から出てくる水滴になって、水道管の中で長い旅していたというのです。葛飾北斎の波を思わせる素敵なわけがあったのでした。

とはいえ時間を忘れるということは、生活を営む上でも支障をきたすわけですから、叱らざるを得ない。しかし叱っても効果はない。そこで、編み出したのが、『空気を知る3秒ルール』。漫画を入れて解説し、実践と振り返りを繰り返すうちにうまくいく。こうして、行動のもとにある理由を理解して、具体的な対策を共に考え、実行。できたら褒める。本人もうまくいく手ごたえを味わう、この好循環を繰り返すうちに、それぞれの個性が輝き出す。さらに、毎週1回、個別ミーティングを開き、できないことはどうしてできないか、どうすればうまくいくかを一緒に考えていったそうです。

やがて、ニャーイは、結婚し、翻訳・通訳、バイリンガル司会、ナレーター、英会話指導、イラストレーターとして活躍。結婚の際には、「火星解説書」を作成して、これまでのスキルが結婚後も生かされるよう託されたそうです。平岡さんは、「子どもたちの特性をありのまま受け止め、ストレスなくできる環境を整え、周囲とうまくやっていく方法を、本人が見つける手伝いをするのが解決の近道」だと述べています。

私は、あの夏の徳島大会後、東京の教育委員会や校長先生、教職員の方々の会に平岡さんをお招きしました。大勢の先生方に聞いて戴き、「普通であることをよしとしがちな日本の風潮」が少しでも改善されることを願って…。

参考・引用文献 「うちの火星」 著者 平岡禎之、出版社 光文社、2014年初版